【台湾魅力発信】
鍾興華・原住民族委員会副主任委員特別インタビュー（後編）

公益財団法人日本台湾交流協会台北事務所
総務室主任　寺山　学

　9月号で掲載した前編に続き、10月号でも鍾興華・原住民族委員会副主任のインタビューを掲載します。後編となる今回は、台湾原住民とオーストロネシア語族との関係や原住民の信仰などについて伺いました。（※日本では「先住民」という言葉が一般的ですが、台湾では「原住民」と用語が定着しています。現地での呼称を尊重するため、本文では「原住民」と表記いたします。）

・インタビュー実施場所：原住民族委員会
・インタビュアー：公益財団法人日本台湾交流協会台北事務所総務室主任・寺山学

＜鍾興華氏　略歴＞

・パイワン語名：Calivat‧Gadu
・1960年6月13日生まれ
・屏東出身（パイワン族）
・国立政治大学民族学研究所卒業
・主な経歴：
原住民族委員会文化園区管理局事務委員会組長
台湾省政府法規委員会編集者
東呉大学、実践大学、大仁科技大学兼任講師
原住民族委員会常務副主任委員（現在）

●民進党政権における歴史的な政策転換

（寺山）民進党は歴史的に原住民政策を重視してきたと思いますが、蔡政権発足後、原住民政策においてどのような変化が生じていますか。

（鍾興華・副主任委員）漢民族が台湾に渡来してからの四百年以来、台湾の原住民は常に抑圧され、台湾の歴史から疎外された状態が続いてきました。この状況が蔡政権の発足によって大きく転換しつつあります。

　前編で述べた蔡政権が進める憲法改正や原住民族委員会の成立も歴史的な意義を持つものですが、それ以上に2016年8月1日、台湾の歴代の統治者が原住民を抑圧してきた歴史的事実について、蔡英文総統が台湾の総統として初めて公式に謝罪したことが大きな歴史的意義を持ちます。これは四百年以来、原住民が歴代の政権から無視され、差別され、原住民としての主体性を持つことができなかったことについての謝罪です。総統が自ら率先して過去の誤りを認めたことで、台湾人の原住民に対する認識が大きく転換し、原住民政策がより積極的なものに変化する契機となると思います。

●オーストロネシア語族の一員としての台湾原住民

（寺山）台湾の原住民はマレー系のオーストロネシア語族（中国語では「南島民族」）に属すると言われていますが、オーストロネシア語族は、西はマダガスカル島から東はイースター島まで広い範囲に分布する民族です。現在、台湾政府は台湾原住民とオーストロネシア語族の関係に着目し、台湾と各国に広がるオーストロネシア語族との関係強化のための様々な施策を打ち出していますが、鍾興華・副主任委員は、台湾の原住民とオーストロネシア語族の関係をどう捉えていますか。また、今後どのような方法で関係を強化していくお考えですか。

（鍾興華・副主任委員）ご指摘のとおり、台湾原住民はオーストロネシア語族に属しています。オーストロネシア語族は太平洋とインド洋を股にかけ、全世界で約3億人もの人口を擁する民族です。

オーストロネシア語族の起源については、様々な学説が存在しますが、オーストロネシア語族の最も古い語源が台湾原住民に残っていることなどから、近年台湾がオーストロネシア語族の起源地

台湾原住民族文化園区（屏東県瑪家郷）
原住民の住居や暮らしを再現した博物園

であるとの見方が広まっています。具体的には、豪州の考古学者である Peter Bellwood 氏などがそうした主張を唱えています。台湾に居住していたオーストロネシア語族の祖先が、何らかの原因により、海を渡り各地に散らばっていったと考えられているのです。実際、ニュージーランドのマオリ族の部族の中には、自分たちの先祖は台湾から来たと伝承されてきた部族も存在します。彼らは我々に会うと尊敬の念を込めて「台湾の原住民は我々のご先祖です」と話してくれます。

台湾とオーストロネシア語族の関係性をめぐっては、近年台湾としても様々な研究や調査を行っています。実際、台東にある国立台湾史前文化博物館は、前述の Peter Bellwood 氏と協力して南太平洋と台湾における遺跡調査を行っていますが、この調査の結果、双方の遺跡には様々な共通点が存在していることが分かりました。

オーストロネシア語族との関係性については、自分自身も大変興味深い経験をしたことがあります。以前、インドネシアのある博物館の関係者を台湾に招待した際のことですが、視察を終え、外で車を待っている間、私が自分の母語であるパイワン語で同僚に対し「雨が降りそうだ」と話した

台湾史前文化博物館（台東市）
漢民族渡来前の台湾史について展示

ところ、パイワン語を解するはずがないインドネシアの客人が「雨が降りそうなのですか？」と質問してきたのです。これには私も大変驚きました。なぜ我々が話す言葉を聞き取れたのでしょうか。後に分かったのですが、パイワン語とインドネシア語の「雨が降る」という言葉は同じだったのです。これ以外にも、台湾原住民とオーストロネシア語族の言葉には様々な共通点があることが分かっています。手、目、鼻、耳など身体に関わる単語に高い類似性が確認できる他、数字の数え方も共通点があり、1から10まで数えて見れば、そのうちのほとんどの数字はほぼ同じ言い方であることが分かります。

オーストロネシア語族の関係国・地域の協力を促すため、台湾政府は、関係国・地域が参加する「南島民族論壇（Austronesian Forum)」というフォーラムを主催しています。オーストロネシア語族の関係国・地域が一堂に会するフォーラムであり、オーストロネシア語族としての協力や意識を高める上で大変有意義なフォーラムです（※今年8月1日に行われた同フォーラムで、フォーラム本部をパラオ、事務局を台北に設置し、総会を2年に一度開催することが決まりました)。

また、現在台湾政府は、東南アジアやオセアニア地域等との関係強化を目指す「新南向政策」を積極的に推進していますが、この新南向政策の対象国の中にも多くのオーストロネシア語族の国が存在します。今後は、新南向政策を通じ、更なる関係強化に取り組み、特に文化交流の面から交流を活発化していきたいと考えています。

●台湾原住民の宗教―土着信仰とキリスト教の融合―

（寺山）次に、原住民の宗教についてお伺いしたいのですが、原住民族の集落に訪れると、どんなに小さな集落でもプロテスタントやカトリックの教会を目にします。その意味で、キリスト教は台湾の原住民の方々の生活に深く根付いているように見えます。

（鍾興華・副主任委員）私自身、キリスト教徒であることから、台湾の原住民とキリスト教の関係については大変関心があり、長い間研究してきました。台湾の原住民には元々、独自の土着信仰があり、生活と信仰が密接に繋がっています。例えば、最近では多くの観光客が訪れる原住民の豊年祭や祖霊祭は、一見するとお祭りのように見える

南島論壇（2018年8月1日）
蔡英文総統出席の下、盛大に開催。

苗栗県泰安温泉付近のカトリック教会
教会の看板にはローマ字で「Kyokai」と書かれており、日本語の影響が見て取れます。

集落の教会（宜蘭県澳花村）
人口 1000 人にも満たない集落にも数カ所の教会があります。

キリスト教と原住民アートの融合
（新竹市五峰区：清泉部落）

かも知れませんが、実際には原住民の土着信仰の一部分です。例えば、サイシャット族の矮霊祭は、２年に一度の小祭と 10 年に一度の大祭に分けられますが、サイシャット族がタアイ（矮人族）から農耕や医療などの技術を教えてもらったことに対する感謝の意を示すために行う神聖な儀式です。神聖な祭事であることから、矮霊祭には多くのタブーがあります。パイワン族の「五年祭」も神聖な祭事であり、その名のとおり５年に一度祖霊を迎え、祖霊に感謝します。そこでは、キリスト教（プロテスタント）における牧師のように、祭儀ではシャーマンが祖霊と直接対話します。

原住民の信仰は、日本統治時代には上述のような土着信仰が一般的でしたが、戦後状況に変化が生じます。キリスト教はもともと使命感が強い宗教ですが、戦後、キリスト教が台湾社会に広まると、宣教師たちは交通の不便な中、大変な苦労をして、原住民の集落まで布教に訪れました。戦後間もない時期は、原住民集落の衛生状態が悪く、寄生虫が蔓延する状況でしたが、宣教師たちは駆虫薬や洋服を集落へ持ってきて「イエス・キリストを信じてください。神様はあなたたちを守ります。」と伝えました。こうして、台湾の原住民社会において、キリスト教が一気に浸透していったのです。宣教師が集落に持ち込んだ豊富な資源は集落の発展を支え、原住民の集落は台湾でキリスト教の布教が最も成功した場所となったのです。

今日では、キリスト教と土着信仰が徐々に融合の方向に向かっています。一つの例を挙げると、屏東県霧台郷にはルカイ族の阿禮という集落がありますが、2009 年８月に発生した「八八水害」によって多くの家屋が壊滅的被害を受けました。集落を他の場所に移すことが決まった際、土着の祖霊信仰の象徴である「壺」を移動するため、祖霊に許しを得る必要が生じました。では、どうやって祖霊と対話し、許しを得れば良いでしょうか。この時、集落のキリスト教徒の住民たちは、「イエス様、これから私たちは先祖の物を持ち運びます。我々の祖霊に伝言をお願いいたします。どうか祖霊にこの状況を理解していただけますように。」と祈りを捧げたのです。これを解釈するのは難しいですが、この場合の祈りは祖霊と直接対話するのではなく、イエス・キリストへの祈りを通じて土着信仰の祖霊に伝言を託したのです。このように、原住民の土着信仰とキリスト教は衝突の関係

ではなく、融合の関係として確立しつつあります。

●最後に

（鍾興華・副主任委員）皆様ご承知のとおり、台湾の特長の一つは、異なる民族・エスニシティによってもたらされた多様な文化です。しかし、昨今、原住民の間でも、原住民の伝統文化を理解する世代が減り、如何に伝統文化の伝承を行っていくかが大きな課題となっています。台湾社会において、個々の文化の重要性に対する認識がより一層深まり、多民族・多エスニシティの台湾社会において、異なる民族・エスニシティへの相互理解や尊重が更に進むことを願ってやみません。

（編集：寺山学，柴原希恵，樺島彩波，写真：寺山学）